

待降節第3主日 12月18日

## イエス・キリストの誕生

マタイ1章18-24節

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎（たい）の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れた。

### 説教

マタイ福音書はまず「イエス・キリストの系図」（1章1-17節）アブラハムからマリアの夫ヨセフまでの家系図ではじまります。ちょっと退屈な書き出しです。16節には「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」とありますが、これにはちょっと違和感があります。1節からの調子で続けるならば「ヤコブはヨセフをもうけ、ヨセフはマリアによってメシアと呼ばれるイエスをもうけた」となるところなのですが、このようには書いてありません。ヨセフとイエスには血のつながりがなかったことをすでに暗示しているようです。

**イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。マタイ 1:18**

ここでもマリアのことを「母マリア」と呼びますが、ヨセフのことは父とも夫と呼ばず婚約していたヨセフといいます。

ヨセフがどのような経緯でマリアの妊娠を知ったのかはマタイ福音書からではわかりません。マリアがヨセフに告げたのか、ヨセフがふくらんだお腹に気づいたのか、それとは別に世間のうわさで知ることになったのか。ヨセフは苦しみ悩み、考えに考えてマリアと縁を切る、つまり婚約はしたけれど結婚しない、婚約を破棄すると結論しました。

**夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。マタイ 1:19**

このヨセフの決心についてはふたつの解釈があります。1つはユダヤ社会の掟・モーセ律法にもとづいて妊娠したマリアとは結婚しない（姦淫の疑いから）と結論した。2つめはヨセフは聖霊によって妊娠したことを理解した、つまりこの妊娠には神の介入があるということに気づき、身を引こうと決心した。つまりヨセフは神を畏れ敬って、恐れ多くて、マリアとは縁を切る決心をしたとする解釈です。

**このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」マタイ 1:20-21**

ある意味では、ヨセフはイエスに始めて出会った人です。誰もみたことない、

まだマリアの胎内にいるイエスを知った人です。インマヌエル（=我々と共におられる神）に出会った恵まれた男です。しかし、ヨセフからすれば「なんでオレなの？」という気持ちがなかったのでしょうか。せっかくマリアと結婚することが決まっっていて、これから二人でささやかな家庭を築いていこうと願っているだけなのにマリアは妊娠している、ユダヤの掟に従って離縁することもできる。精霊が宿した男の子だって、なんでほかの奴ではいけないのか。どうしてオレなんだ？

それに対する答えはヨセフがダビデの子孫、ダビデの子だからというのがマタイ福音書の回答です。預言によってそれは決まっているのだということです。一方、マリアにいたってはそんな理屈もありません。ルカ福音書では大天使ガブリエルがおめでとう、とマリアに告げるだけです。マリアはとまどい、そののち受け入れます。

**マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。ルカ1:38**

さて、ヨセフにおきたこと、マリアにおきたこと、これは根っこを考えてみれば私たちだって同じです。

一人ひとりが今ここにいる、私はここにいる、という事実はどんな理屈をつけようが説明できません。いままでの人間関係や社会的功績、その他いろいろをいくら積み重ねても、人が人としてここにいる、という事実はでてきません。ただここにいるからいる、それだけ、人の存在にはそういうところが必ずあります。

そして、人が人であるということ、人として生きるように定められていることも、これも自分でなったわけではありません。ですから人が人として生きるように、この世界に置かれているということ、これは単純で条件はない、

何も理由がない。いくらコレコレのことを積み重ねてオレは生きている、悪いことはしていないとか、こんな私なんて生まれるはずじゃなかったとか、オレみたいなものが生きていてもしようがないとか、また私が死ぬなんて不公平だ、などとは全然別のことです。人が人として存在するということは、単純に、人として存在する。あたりまえですが、自分が自分で考えて生まれて来た人はいません。自分が望んで、この父から、この母から、この時代に、この国に生まれてきた人なんていないのです。

いるからいる、ということは、これはどうすることもできない。来ている事実、人として生きるように、与えられた状況の中で、その形をなしている。そういうかたちでお前も生きろ、これを受けいれるしかほかはありません。そういう意味でダビデの子ヨセフの大変な状況というのは私たちが置かれている状況と根本的には違いはない。ここでのヨセフと同じように人間の根本状況というものは恐れおののかなくてはならないのです。

**ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れた。マタイ**

1:24

ヨセフの戦慄、驚き、また恐れるなということばをありがたく聞いた状況、命令を受け入れたヨセフというのは私たちと決して縁のない人ではありません。全然別の人ですが、ただの無縁の人ではありません。ヨセフそしてマリアが受け入れたイエス受胎、そのときの苦しみ・そのときの嘆き・そのときの決意というものが分からなければ、わたしたちは本当にいま、ここで生きるということができない、そういうものだとなわたしは思うのです。

きょうの福音を、神がみ子によって与えてくださった恵みと希望を私たち一人ひとりが自分自身のこととして聞くのでなければ、それは美しいおとぎ話、あるいは不思議な昔話の一節に過ぎないものになってしまいます。実際のと

ころ教会の内でも教会の外でも、降誕の物語はそのようなもの、私たちの救いとは何の関係もないものとしてクリスマスは人々のかたわら流れ過ぎていきます。今日の集会祈願をふたたび祈り、むすびとします。

ともにいてくださる神よ、あなたはひとり子イエスを、世の救い主として遣わしてくださいました。私たちが幼子イエスのうちに、愛と希望の光を見出すことが出来ますように。アーメン

-----